

関西学院大学 研究成果報告

2022年 4月 1日

関西学院大学 学長殿

所属：教育学部

職名：教授

氏名：岡本哲雄

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	ニヒリズムにおける人間形成と教育の語り直し - 主として、V. E. フランクルの主題〈意味/受苦〉への考察を媒介にして -
研究実施場所	自宅、大学研究室
研究期間	2021年 4月 1日 ~ 2022年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究期間の目的は、これまでの上記の研究課題について蓄積を新たな筋立てのもとに纏め、博士学位論文（論文博士）として提出し、それを公刊することにあつた。そして、この目的は、幸いにも期間内に達成することができた。以下は、その経過である。

本研究期間を認められた2020年度末に、かねてより審査をお願いしたいと考えていた京都大学大学院教育学研究科の西平直教授に連絡し、審査のお願いをした。2021年度は、西平教授の定年退官年に当たるため、年度内に審査が終了可能なスケジュールが提示された。いわゆる事前審査に当たる「内見」のための論文の提出を5月末までに完了すべく、研究期間開始早々、短期決戦で論文の再構成の作業に取り組む。その間、2回に亘り西平教授との面談をzoomで行う。5月末に内見のための論文を提出し、6月20日に合格の通知を受ける。その際、全体の構造化に成功し、思想研究として堅実であるという評価を受ける。また、いくつかのアドバイスを参考に修正を加えるとともに、再製本し、8月25日に本審査のための再提出を行う（論文名：「ホモ・パティエンスの人間形成論—フランクルの臨床哲学が歴史に応答したこと」）。9月28日に京都大学大学院教育学研究科内において主査：西平教授、副査：田中康裕教授、高山敬太教授のもとで口頭試問が行われ、合格の内定を受ける（正式には10月21日の教授会で承認）。合格内定を受け、出版に向けて関西学院研究叢書の追加募集に応募し、採択される。10月に株式会社春秋社と大学との間で出版契約を取り交わす。

11月24日付で京都大学より博士（教育学）の学位が授与される（論教博第179号）。その後、春秋社との間で、3か月間に亘り出版に向けての校正作業等を行い、『フランクルの臨床哲学—ホモ・パティエンスの人間形成論』（関西学院大学研究叢書第242篇）というタイトルで、2022年2月20日に発刊の運びとなった。朝日新聞2月26日朝刊第一面広告にも掲載された。4月7日、14日の2回に亘って、人文学系書籍紹介サイト「じんぶん堂」に紹介文が掲載される予定である。

さて、本書の目論見は、V.E.フランクルの臨床哲学を機軸にして、他の諸思想との対話を試みながら「ホモ・パティエンス（受苦する人）の人間形成論」の風景を描いてみることにある。そしてこの内実を描こうとすることによって、フランクル臨床哲学が歴史に応答したことを解明した。考察を進める理由には以下の三つのことがあった。

まず、フランクルのホモ・パティエンスにおける《意味/受苦》の表裏一体性は、近代に偶像化されたホモ・サピエンスの捉え直しを迫るものであり、ポスト近代以降の時代にあっていっそう要請される人間理解であるからである。そして、この人間理解への転回こそが、各領域に相互生成的な動性（人間形成の働き）を賦活する使命を自覚させるものとなりうると考えたからである。なかでも、人間形成と教育は、人類の存続や存在意義にも関連して、人間の実存の切実さを内包している営みである。不確実性著しい今日の時代状況にあって、人間形成と教育は、生老病死の根底に流れる対象化できない〈いのち〉の意味、世界全体の存在意味の次元に引き付けて、受け取り直されることが求められる。

本論文の考察の目標は、以下の二点に集約できる。

① ホモ・パティエンスの人間形成論を《意味/受苦》と《存在の謎》の連関から語り出すという課題。フランクル臨床哲学の再解釈が、改めてホモ・パティエンスという視点から人間形成の捉え方の転回を促すことを論証している。《意味/受苦》と《存在の謎》の連関から人間形成を語り直す試みである。

② ニヒリズムを生きる《教育の倫理》の在り処を語り直すという課題。

人間形成がホモ・パティエンスの視点から語り直されるとき、教育は、歴史的構成である以前のところから捉え直される。そこでは「相対主義の罟を回避した世界開放的な複数主義」を担保できる何らかの《倫理》が要請される。この《教育の倫理》の探究は、ホモ・パティエンスの人間形成論の中心的位置を占めている。

さて、今、何故、ホモ・パティエンスという人間観への転回なのか。「未成熟状態からの脱出」（啓蒙）をめざすホモ・サピエンスの人間形成論は、目的合理主義という視野狭窄に陥った。これは学問が、パトス（受苦、情念、身体）との提携を切り、ロゴスを矮小化させたことと深く関連する。これでは、テクノロジーやシステムによる生活世界の植民地化によって衰弱化する人間形成と教育の地盤を救済できない。したがって、今こそ、他者と共に受苦し、祈りながら行為し、応答し合い、相互に生成することを促しうるホモ・パティエンスという人間理解に立脚した人間形成論が要請されるのである。なお、本書の構成は以下の通りである。

[序章 ホモ・パティエンスの人間形成論と《教育の倫理》]

【第I部 〈意味〉と《存在の謎》—フランクルの臨床哲学からみた人間生成】

第1章「ロゴセラピー=実存分析」—その臨床知がもつ歴史的含意

第2章「もとにある」—《倫理》の存在論

第3章 人間生成と《存在の謎》—日常のメタフィジック

* Intermezzo 1 * パトスの原風景Ⅰ—「過去のオプティミズム」をめぐる

【第II部 フランクルの臨床知と教育の出会い—《教育の倫理》への模索】

第1章 フランクルの教育論が意味すること

第2章 教育人間学において—対話は成し遂げられたのか？

【第III部 ホモ・パティエンスが拓く地平—ホモ・サピエンスの語り直し】

第1章「聴くこと」と創造性—はじめに受動ありき

第2章 〈意味(ロゴス)による生成〉への奉仕(セラピイア)—ホモ・パティエンスの視点からの語り直し

* Intermezzo 2 * 寄る辺なき時代の私たちへ—人を育てる人を育てるために

【第IV部 ニヒリズムと教育 —《教育の倫理》の在り処へ】

第1章 教育の意味、そのゆくえ—教育の「見立て」についての思想的素描の試み

第2章 ニヒリズムと教育の相入反転—意味の声は聞こえるか？

* Intermezzo 3 * パトスの原風景Ⅱ—「自殺」予防、「安楽死」阻止にみる意味信仰

【第V部 《存在の謎》から人間形成を語り直す地平を求めて】（考察の目標①に該当）

第1章 《存在の謎》とニヒリズム

第2章 《存在の謎》の物語りとしての日常性

第3章 人間形成の汲み尽くせぬ意味、消しえぬ声

[終章 ホモ・パティエンスの人間形成論の意義—フランクルの臨床哲学が歴史に応答したこと]

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。